

随 想

ゴルフはまだ嗜まざるの記

大 川 順 正*

そろそろゴルフを始めたかどうかという誘いが、あちらこちらからやってくる。なかには、ありがたいことに、自分の使い古しのクラブを進呈するからやってみるというご奇恃な申し出もあって恐縮している。

たしかに、いま、日本中は、ゴルフの全盛期のようで、電車の中でもゴルフバッグがよくみかけられ、学会場でもゴルフバッグをもった方をときにおみかけする。また、テレビ番組でも、いたるところで、ゴルフの実況がうつし出され、はては、愚息の愛読する少年雑誌にまで、“プロゴルファー猿”とかいう奇想天外な漫画まで登場するきょうこのごろではある。

おかげさまで、私も、門前の小僧何とやらで、用語やルール、あるいは人気の高いプロゴルファーの詳細な解説をできるくらいまでの知識だけは身につけているのに、いまだに、まともにクラブを握ったことがない。若いころからスポーツが好きで、とくに小さな球を扱う競技はほとんどこなしてきた私にとって、ゴルフは恰好の対象となるはずなのに、どうしても、その気になれない。いまや、外国から流れてきた金持ちだけの遊びという感覚から、大衆の娯楽に変わりつつあるとはいうものの、ゴルフという言葉にまつわるもろもろの概念、あるいは、いつものことながら、ブームといわれてすぐ熱していく日本人の特性に、一種のひがみ根性から反発しているのかも知れない。

せんだって、中部連合地方会に やってきた、USCの Dr. Deeths という男も、ゴルフがたいへん好きだといって、1日だれかが相手をしたそうである。かれの理由がふるっている。“だって病院から離れられるだけでもすばらしいことじゃないか。”医者の上にも…と目にかどを立てられる堅いお方は別として、何となく気もちのわかる表現ではあるし、空気はよいだろうし、足腰の鍛練にもなるだろうし、広々としたフェアウェイに広がる開放感など想像しただけでも、これから漸次老化していく身にとっては、たしかによいものだろうとは思っている。

敬愛する大阪のM先生も、最近ゴルフを始められた

と聞いている。はなはだ失礼ながら、M先生は、体型的にも感覚的にも、あまりゴルフとはぴったりこない感じだったから、おそらく、すぐにおやめになって、“あんなくだらん遊びは性に合わん”とおっしゃるだろうと思っていたところ、どうもそうではないらしく、うわさによると、かなりの腕前に達しておられるようである。そういえば、M先生は、その昔、いっしょに野球をしたことがあって捕球はともかくとして、打撃だけはからだに似合わず鋭かったように思い出される。それにしても、いったん始められた人びとが、あまり途中でやめないで、むしろ、なかには、だんだんと嵩じて、いわゆる病こうもうとなっていられる場合も多いと聞かされるとき、たかが、小さな球を前へ飛ばして、穴の中へ放りこむだけの遊びとはいうものの、それがかなり楽しいものであるということとは、いつも思っているところである。

しかし、私は、がんこに、まだやらないんだといい続けている。若い教室員のなかには、かなりの腕をもっている人たちもいるらしく、手を変え、品を変えて、誘いこもうとしているようである。教室で、ゴルフの話題が出ると、私も負けずじやある知識のほどを披露し、自分の運動神経をもってすれば、もし実践にうつせば、けっしてひけをとるものではないと自信のほどを訴えるのが常ではあるが、それでもなお、いったん始めると、なかなかやめられないといううわさのたかい麻薬のようなこの種の遊びは、私ども、大学にいらるような連中には縁遠いものと漠然と考えているだけというところが本音だろう。

この随想を書くにあたって、敬愛するS先生は、“おまえ泌尿紀要に馬鹿なことを書くと、一生ゴルフができなくなって、あとで自分が困ることになるぞ”と笑いながら忠告してくださった。そこで、私も考えたあげく、最初に思い浮んだ表題“ゴルフぎらい”から“ゴルフたしなまず”と変え、さらに“いまだ嗜まざる”という結構な言葉をみつけ出したしだいである。何年かさきには、“やっぱりあいつも”と笑われながら、バッグをかついで、いそいそとゴルフ場に出かける自分の姿を想像しないわけでもない。

* 和歌山県立医科大学泌尿器科学教室 教授